

観戦バリアフリー 達成は2割

時時刻刻

ミラノ・コルティナ冬季パラリンピックに合わせ、朝日新聞は2月、国内の主要プロスポーツチームの本拠地について、観戦のバリアフリーの状況を調べた。法的な基準が設けられたのが昨年だったこともあり、求められた水準に達していない競技場が大半である一方、観戦環境を整えようと試行錯誤するチームもあった。

プロ野球12球団、サッカーJ1の20クラブ、バスケットボールB1の26クラブの本拠地を対象に調査を実施。44団体から回答があった。

国土交通省は2015年、車いす席数は観客席数の0.5〜1%以上あることが望ましいという目安を示した。それ以降も法的拘束力はなかったが、昨年のバリアフリー法施行令改正で設置基準が設けられ、設置が義務づけられた。401席以上の競技場の場合、観客席数の0.5%以上と定められている。

今回、回答があったうち、法令で定める0.5%以上という基準を満たしている施設は全体の2割弱だった。国交省から目安が示された15年以降に完成した競技場に絞ると、約3割だった。施設は自治体の持ち物であることも多く、チームとしてすぐに対応できない事情もある。そんな

主要プロスポーツチーム本拠地 車いす席 法令で「0.5%以上」

橋名誉教授は「競技場建設の早期から、当事者団体や運営事業者、施工業者が話し合う場を設ける必要がある」と話した。スポーツ庁が24年に約6千人の障害者を対象に実施した調査によると、回答者のうち約3割は過去1年に何らかのスポーツを現地で観戦していた。こうしたニーズがある中、観戦をしやすい環境をつくる方法は、車いす席の拡充以外にもある。

プロ野球広島には車いす席利用者の要望に応える専門スタッフがいる。J1浦和では、視覚や聴覚に障害のある人にも対応。案内所に「筆談可」の表示がある。

海外に目を向けると、今回のパラリンピックでは、IPCのガイドラインに沿って、「1万席未満の競技場なら1%」といったように、観客席の規模ごとに割合が定められている。

海外で障害のある人への対応が進んでいるのは米国だ。スポーツ庁の参与を務めたことがある順天堂大学の雪下岳彦非常勤講師は、大学生のときの事故で車いすを使うようになったら、高

戦が趣味だった。衝撃を受けたのは04年に訪れた大リーグ・パドレスの本拠地パットパーク。最前列に車いす席があり、プレートを間近で見ることができた。他の競技場も訪れたが、いずれも車いす席の種類が豊富で、既成概念を覆されたという。



①マツダスタジアムの車いす席。かつては介助者用のいすが床面に固定されていたが、利用のしやすさを考えて可動式になったという＝2月5日



②岐阜メモリアルセンター長良川競技場を視察する「VER Sports Base」代表の宇野奈穂さん。視線の高さにコンコースの柵があった＝同22日



「平和・包摂・連帯」より重要に

当事者意見で高い柵撤去

取り合わないクラブがある一方で、視線を遮る高い柵を撤去するなど対応してくれたクラブもある。昨年7月に団体を立ち上げ、現在は障害のあるサポーターとクラブが定期的に対話する機会を作ろうと働きかける。10月にはJ2いわきが新スタジアム建設に向け、対話の場を設けた。

サポーター担当者配置

プロ野球・広島の本拠地、マツダスタジアム(広島市)には約140の車いす席がある。プロ野球12球団で屈指の多さだが、整っているのはハード面だけではない。

球団には主に車いす席利用者の困りごとをサポートするための「ホスピタリティスタッフ」がいる。09年の球場開業と同時に誕生。現在は約30人がアルバイトで登録され、試合の日は10人前後が球場で対応する。

現場での積み重ねが、球場の環境改善につながったこともある。開場当時は、介助者用のいすが床に固定されていた席があった。だが、車

パラリンピックボランティアが会場に入った





ミラノ・コルティナ・パラリンピックの開会式で入場するロシアの選手たち=いずれも6日午後、イタリア・ベローナ、吉田耕一郎撮影



ミラノ・コルティナ・パラリンピック開会式で、ウクライナは参加をボイコットし、ボランティアが持つ国旗だけが入場した

も法的拘束力はなかったが、昨年のバリアフリー法施行令改正で設置基準が設けられ、設置が義務づけられた。401席以上の競技場の場合、観客席数の0.5%以上と定められている。

今回、回答があったうち、法令で定める0.5%以上という基準を満たしている施設は全体の2割弱だった。国交省から目安が示された15年以降に完成した競技場に絞ると、約3割だった。

施設は自治体の持ち物であることも多く、チームとしてすぐに対応できない事情もある。そんな

東洋大学の高橋儀平名誉教授によると、21年の東京パラリンピックが競技場のバリアフリー化の大きな転機になったという。国際パラリンピック委員会（IPC）のガイドラインや、国立競技場のバリアフリー化が知られ、各地の競技場建設で参考にされている。

車いす席については今後、数の面では整っていくとみる。次の課題は「車いす席を生かすための運用」。車いす利用者のための駐車場の数や、座席までの移動手段などの改善が挙げられる。高

ミラノ・コルティナ冬季パラリンピックは、55カ国・地域が参加する過去最大の大会となった。しかし、開会式にはロシア、ベラルーシの参加に対する抗議としてウクライナなど7カ国の選手の手はなく、中東情勢の緊迫でイランも欠場。「共生社会の実現」をうたう

Milano Cortina 2026 Paralympic Winter Games

「平和・包摂・連帯より重要に」

大会は、国際紛争が影を落とす異例の幕開けとなった。▼1面参照

ロシアは、4人が国旗を先頭に手を振りながら入場した。ドーピング問題やウクライナ侵攻により国としては除外されてきたロシア選手が、国代表として五輪・パラリンピックに参加するのは2014年のソチ大会以来。会場ではエールを送る観客がいる一方、ブーイングも起きるなど異様な雰囲気となった。

一方、ウクライナは選手団が開会式をボイコットのあいさつで、「五輪

トしたため、ボランティアが持つ国旗のみの入場となったが、会場からはひととき大きな歓声と拍手がわき上がった。

チェコ、エストニア、フィンランド、ラトビア、リトアニア、ポーランドも開会式に参加せず、選手の姿はなかった。米国、イスラエルと戦況状態にあるイランは「安全にイタリアに移動できない」として、直前に参加を取りやめた。

大会組織委員会のジョバンニ・マラゴ会長は開会のあいさつで、「五輪

パラリンピックの核心にある平和、包摂、連帯のメッセージは、これまでに重要なものとなっている」と述べた。

また、7日のアルペンスキー女子滑降立位で、ロシアのワルワラ・ウォロンチヒナが銅メダルを獲得した。ロシア代表としてのメダルはソチ大会以来。競技後、報道陣にもウクライナ選手と競っていたらと問われると、「政治的なことは話したくない」と言って取材を打ち切った。

（比嘉展玖、藤野隆晃）

主要プロスポーツで 車いす席 法令で

J1浦和では、視覚や聴覚に障害のある人にも対応。案内所に「筆談可能」の表示がある。

国外に目を向けると、今回のパラリンピックでは、IPCのガイドラインに沿って、「1万席未満の競技場なら1%」といったように、観客席の規模ごとに割合が定められている。

海外で障害のある人への対応が進んでいるのは米国だ。スポーツ庁の参与を務めたことがある順天堂大学の雪下岳彦非常勤講師は、大学生のときの事故で車いすを使うようになったらまでスポーツ観

竣工年と車いす席の関係

ホームスタジアム、球場、アリーナの竣工

2014年以前の施設	2015年以降の施設
車いす席が0.5%以上の球団・クラブ	4
改修中で、改修後に0.5%以上になる施設を含む	4
車いす席が0.5%未満の球団・クラブ	27
	9

車いす席の数は、車いすユーザーが入れる最大数で、介助者・同行者のみが対象の席は除く。割合は、車いす席を分子、観客収容数を分母とし、小数点第2位を四捨五入



① マツダスタジアムの車いす席。かつては介助者用のいすが床面に固定されていたが、利用のしやすさを考えて可動式になったという=2月5日

② 岐阜メモリアルセンター川競技場を視察する「Sports Base」代表の奈穂さん。視線の高さ1メートルのコースの柵があった=

独自の工夫 ■ 当事者意見で高い柵撤去

プロ野球・広島の本拠地、マツダスタジアム（広島市）には約1400の車いす席がある。プロ野球12球団で屈指の多さだが、整っているのはハード面だけではない。

球団には主に車いす席利用者の困りごとをサポートするための「ホスピタリティスタッフ」がいる。09年の球場開業と同時に誕生。現在は約30人がアルバイトで登録され、試合の日には10人前後が球場で対応する。

現場での積み重ねが、球場の環境改善につながったこともある。

開場時は、介助者用のいすが床に固定されていた席があった。だが、車いすの大きさや、左右どちらからの方が介助しやすいかは人それぞれ。より良い環境にしようと、16年から介助者用のいすは可動式になった。

それでも、課題はまだ残る。たとえば、男女それぞれのトイレ内に車いす利用者が使える個室があるため、車いす利用者と介助者の性別が異なる使用起来にくい。車いす利用者と同様のスタッフが付き添うなど、柔軟に対応しているという。

スタッフの統括役を担う球団職員の後藤桃香さん（29）は「席数で言えば全体のごくわずかだけど、そこにかける熱は大きい」と語る。スタッフとともに掲げる目標は、「マツダスタジアムならふらっと行けるかも、と思ってもらえる場所になること」だ。（藤野隆晃）

サポート担当者配置

団体を立ち上げ、現在は障害のあるサポーターとクラブが定期的に対話する機会を作ろうと働きかける。10月にはJ2いわきが新スタジアム建設に向け、対話の場を設けた。

宇野さんは「働きかけがなくても、誰もがスポーツ観戦で悔しい思いをしない未来になれば」と願う。（比嘉展玖）